

林訳小説《紅篋記》などの原作（上）

渡辺浩司

1

言わずもがなであるが、「林訳小説」の「林」とは、林紘(1852-1924)のことである。林紘は、晩清から中華民国期にかけて、翻訳小説を大量に発表し、外国文学の紹介に大きく貢献した。惜しいことに、原作については詳しく述べないことが多く、原作不明の作品も多かった。近年、かなりの原作が明らかにされているが、未だに原作不明の作品が残っている。

その中、《小説月報》に掲載された作品について、原作が判明したので報告する。

《小説月報》は晩清1910年創刊で、民国期まで続き、この時代の代表的な小説雑誌である。その第七巻第四号(1916年4月25日*¹)から第九号(同年9月25日)にかけて、英國希登希路原著、閩縣林紘・靜海陳家麟同譯《紅篋記》6話連載と《少尉夏雷尺石忒》等6短篇が掲載された。

《紅篋記》の原作は、Headon Hill 『Perils of the Red Box』で、《少尉夏雷尺石忒》等6短篇の原作は、同『Seaward for the Foe』所収の6短篇である。Headon Hillは、本名 Francis Edward Grainger というイギリス人で、1857年生、1927年卒。記者をしていたらしいが、短篇集を含めて約60の著作がある。

原作について、本稿で使用した版本は、『Seaward for the Foe』(Ward,Lock and co.,limited 1903年)で、前半に『Seaward for the Foe』、後半に『Perils of the Red Box』が収められている。それぞれが一冊本として出版されたことがあるかは不明。前者は、イギリスとフランスが開戦したという共通の設定で描かれ、10篇あり、各話独立した物語である。後者は、イギリス外務省の文書配達係 Melgund を主人公とし、彼が遭遇した様々な事件の体験記で、6篇ある。主人公が同じである以外

は、6篇それぞれ独立した物語である。但し、主人公の詳しい紹介は第1話にあるので、第1話を読んでいないと理解しがたい部分もある。

中国語訳は、《紅篋記》が前の頁、《少尉夏雷尺石忒》等6短篇が後の頁に掲載されたが、原作は上述のとおり、『Seaward for the Foe』の方が先なので、「(上)」で《少尉夏雷尺石忒》等6短篇の原作について述べ、「(下)」で《紅篋記》について述べることにする。

2

《少尉夏雷尺石忒》等6短篇について、発表順にみると以下ようになる。

- 1 少尉夏雷尺石忒 英國希登希路原著 《小説月報》7-4, 1916.4.25
- 2 無綫電報 英國希登希路原著 《小説月報》7-5, 1916.5.25
- 3 法國魚雷艇受擒 【原著者名無】 《小説月報》7-6, 1916.6.25
- 4 馬格梯氣球 【原著者名無】 《小説月報》7-7, 1916.7.25
- 5 三十九號魚雷艇 【原著者名無】 《小説月報》7-8, 1916.8.25
- 6 挖地道 【原著者名無】 《小説月報》7-9, 1916.9.25

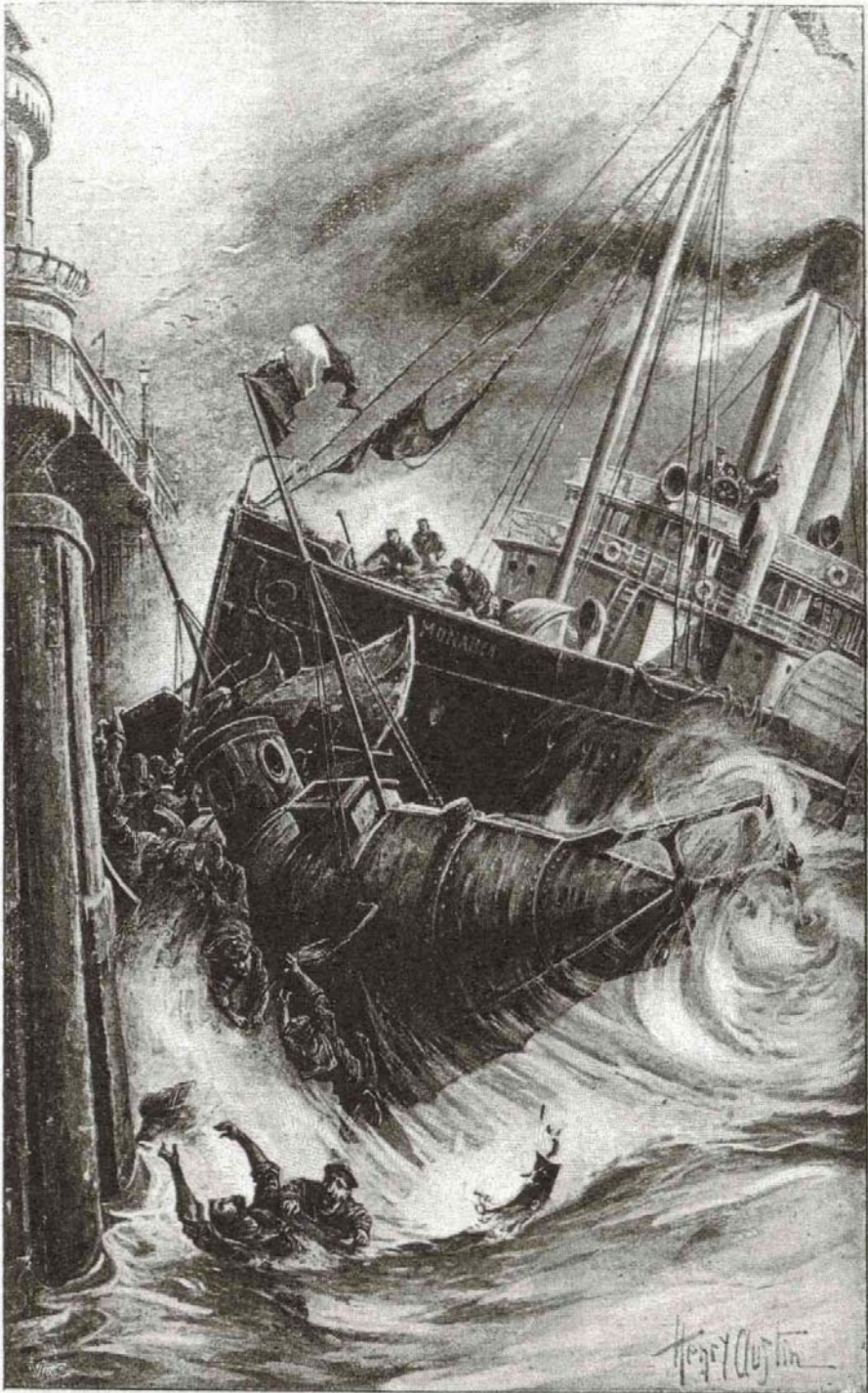
繰り返しになるが、原作はすべて Headon Hill 『Seaward for the Foe』 (Ward, Lock and co., limited 1903年)の前半、書名と同じ『Seaward for the Foe』部分に収められている。

2 - 1 《少尉夏雷尺石忒》

原作は、『Seaward for the Foe』 「 How the ‘ Vengeur ’ Came to Bournemouth 」である。あらすじを紹介する。

イギリスはフランス・ロシアと開戦した。開戦当初の6月、Bournemouthの海岸には戦争の実感をまだ持たない観光客らがいた。朝早く、沖合いに現われたり消えたりする怪しい物体を水夫が見つけた。また、Bath ホテルから同様に Millicent Hardacre もその物体を見ていた。彼女は富豪の娘で、父が認めない恋人 Harry Chichester が海軍の一員として出征するので、その日、お別れのあいさつをするつもりでいた。

その怪しい物体はフランスの潜水艦 Vengeur で、埠頭に接岸し、兵士が50名上



"The bows of the excursion steamer crashed into the *Vengeur* amidships.

Seaward for the Foe]

[Page 24

陸してきた。その半分が Bath ホテルに現われ、富豪に50万ポンドを要求し、拒否すれば町を砲撃すると脅迫する。富豪が拒否すると、フランス軍は富豪を潜水艦に乗せ、1時間の猶予を与え、期限が切れると町を攻撃し彼をフランスに連れ去ると言い、埠頭を離れる。

一方、娘のもとに町長と Harry Chichester がやってくる。Harry は町長に指示し、旗を使い潜水艦に向けて町が後でお金を補償すると伝えさせ、また町にいた志願兵を引き下がらせる。Harry 自身は遊覧船 Monarch にその船長とともに乗り込む。旗による伝言が間に合わず、1時間後、町は砲撃を受け、教会が破壊される。その後、潜水艦は再び接岸し、落胆した富豪が降ろされる。潜水艦が陸上に気を取られている時、背後から遊覧船がぶつかり、潜水艦を沈没させる。フランス軍は大部分が救出され、捕らえられる。富豪は Harry に50万ポンドの借りができたので、彼が出征から無事に戻ったら、娘 Millicent との結婚を認めると言い、二人は握手する。

知恵を使って勝利し、恋人同士の仲も認められるというハッピーな物語である。設定自体が一富豪への金銭要求で、国が命令していたならば、非常に貧乏くさい作戦であるし、潜水艦の単独行動ならば、規律のゆるすぎる軍隊である。また、最後に、船体に穴を開ける勢いで突進する船に全く気付かないことなどあり得るのかと思ってしまう。

中国語訳について述べる。他にも訳されていた場合の参考にできるので、主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Harry Chichester	夏雷 尺石忒
Millicent Hardacre	美利森梯 夏達克
Vengeur	温克阿
Monarch	莫那克

翻訳については、省略がやや多いことが言える。全般にわたって、略したり簡潔な表現に改めているので、省略の多さが突出している部分は見られない。最初に、他の短篇にもかかわるので、冒頭部分を見ておく。原作と中国語訳を挙げる。

Though the long-threatening war-cloud had burst at last, and Great Britain stood face to face with allied France and Russia for the death-grip, people had not begun to realize that their interest in the struggle might be a personal one. There was more to talk and read about, of course, and bread was getting dear, but a sharp shock is needed to shake one out of the conviction that nothing unusual can happen amid everyday surroundings. Even on the coast the sight of warships in the offing flying the white ensign, all of them, so far had only added a gratuitous attraction to seaside resorts, and strengthened the general feeling of security.(7頁)

(戦争を予兆し続けていた不穏なガスがとうとう爆発し、イギリスはフランスとロシアの同盟に正面から宣戦したけれども、戦いが個々人に関わってくるかもしれないことについて、人々の認識は遅れていた。それについて話したり読んだりすることは多く、パンが貴重なものになりつつあったが、日常の中に異常事態は起こるはずがないという信念から人々をはじき出すには、激しい衝撃が必要とされるのである。海岸でさえ、沖の艦隊の姿は - はるか遠くで全艦が海軍旗をはためかせていたが - 海辺のリゾートのための無料の呼び物となり、一般の安心感を強くするだけだった。)

今日法俄連盟。與英國宣戰矣。夫英以一島國。角此兩雄。似有強弱之分。然英人泰然。初不以戰事爲意。長日聚而議論。偵取海上消息。惟麪包之價。因之日昂耳。餘則貿易。一如常度。沿海則戰艦如織。日日梭巡。人人咸見艦上高牙。飄揚於風中。於是士女野遊。及於海濱。轉形安謐而有恃。(1頁上 句点は原文のまま、以下同)

(今日、フランスとロシアの同盟はイギリスに宣戦した。イギリスが一島国としてこの両国と争うのは強弱の違いがあるようだった。しかしイギリス人は落ち着いており、戦争を全く意に介さなかった。日中、集まって議論したり、海上の様を確認してはいた。パンの値段が戦争のために上がるだけで、その他は貿易も普段どおりだった。沿海地域では、戦艦が機織の梭のように毎日巡回していた。人々は艦上の牙旗がはためいているのを見た。そこで、男も女も遊びに出かけ、海岸まで来るとますます安堵し、頼りにするのであった。)

このような感じで、省略と改訳をしている個所が多い。誤りを一例挙げておく。最後に遊覧船が潜水艦に体当たりする場面である。

But when the millionaire had stepped ashore, and the jaws of the turtle-back were slowly closing, her gaze was diverted by a movement further seaward, and her heart almost stopped beating. There was the good ship Monarch, gaily starting on her last trip, with Harry Chichester and her own skipper at the wheel, steering her straight for the Vengeur, which, apprehending no danger from the sea, had kept all her attention for the shore.

The grim business had been timed to a nicety. The bows of the excursion steamer crashed into the Vengeur amidships, the force of the collision jamming the enemy into the pier piles, and dislocating her mechanism so that the jaws of the roof would not shut. Then, withdrawing her shattered bows far enough to gather fresh way, the Monarch went for her again, and fairly bore her under, the inrush of water into the half-closed turtle-back causing her to sink like a stone.(24-25頁)

(しかし百万長者が海岸へ向かい、潜水艦の甲羅のような屋根がゆっくりと閉まり出した時、彼女の目ははるか海の方の動きに向けられ、心臓が危うく止まりそうになった。Monarch号が、操舵室にいる Harry Chichester と船長と共に、派手に最後の航海を始め、Vengeur に向かってまっすぐ進んでいた、Vengeur は海の方に危険はないと思い、海岸へすべての注意を向けていた。

この失敗できない仕事は正確に計算されていた。汽船の船首は Vengeur の中央に激しくぶつかり、その衝突の力は棧橋のパイルに敵を押しつぶすほどで、潜水艦の機器に狂いが生じ、屋根が閉まらなくなった。そして、Monarch は勢いをつけるために壊れた船首を十分に下げ、再度突入していき、潜水艦の下部に大きな穴を開けた、半分閉じた屋根への浸水により潜水艦は石のように沈んでいった。)

顧夏達克登時。而潛艇之蓋垂合。方其未合之時。見遊船亦至。而女所坐之小遊船。亦同趣潛艇而來。然潛艇之人。方注目岸上。不計遊船從後而來。二船直觸此艇。一橫一豎。潛艇之機立壞。此二船復退。退而復進。再觸其機。潛艇立沈。

(6頁)

(夏達克が岸に上がったのを見て、潜水艦の屋根が閉まり始めた。まだ閉まりきっていない時、遊覧船も到着し、女性が乗った小さな遊覧船も潜水艦に向かってきた。しかし潜水艦の乗組員は岸の方に注目しており、遊覧船が後ろからやってくるとは考えていなかった。二隻の船は潜水艦に向かって、一隻が横から一隻が正面からまっすぐにぶつかっていった。潜水艦の機器はすぐに壊れた。この二隻は後退すると、再び潜水艦にぶつかっていった。潜水艦はすぐに沈没した。)

中国語訳では、突然女性が乗った船が登場し、二隻で潜水艦に突進するという展開になっている。或いは船の代名詞“her”を誤解したのかもしれないが、不可解な訳である。

2 - 2 《無綫電報》

原作は、『Seaward for the Foe』 「 The Wireless Telegram」である。あらすじを紹介する。

Kynance Coveの海岸で、18歳のArthur DarylとAda Penruddockが歩いていた。Arthurはフランス語の欠点で陸軍に入隊できず、不満を漏らしていた。Adaは話題を変えようと近くにそびえる無線通信のアンテナについてArthurに尋ねた。その会話中、二人は画架・大型のかばんを持った男に出会う。Adaによると、その男はMelvilleといい、画家でこの辺りの風景を描きに来ていた。Melvilleがそそくさと去った後、Arthurは彼がフランス語の試験官だったと言い、彼に疑いを持つ。二人は途中で分かれる。Arthurは灯台の方へ進み、海岸巡視員のMortonに会い、Melvilleについて尋ねる。Mortonも初めは彼を疑ったが、実際に描いた絵を見たり、本人の説明を聞いたり、場所自体が辺鄙なことから疑いを解消していた。しかし、Arthurはその話から絵を描きに行くにはあまりに険しい場所なので、かえって疑いを深める。その後、灯台で無線機について教えてもらい、いったん帰宅する。昼食後、再び出かけ、Melvilleを見つけ、跡をつける。Melvilleは絵を描くふりをして、Mortonをやり過ごし、引き潮で陸続きになったAsparagus島に移る。Arthurは追いかけて、見つからないように険しい岩礁を跳び越え、監視を続けた。

Melville は岩の間から無線機を取り出し、通信を始めた。十分後、Melville が片付けを始めると、Arthur は彼に近づき、「フランス語で “ wireless telegram ” をどう言うのか？」等と声をかけた。Melville は近づこうとする Arthur に銃を向ける。Arthur が進退窮まった時、一人だけで来ていた Ada が機転を利かし、「こっちよ、みんな！彼はここよ！」と叫ぶ。たじろいだ Melville から Arthur は銃を取り上げ、逆に銃をつきつけ Melville を連行し、海岸巡視員に引き渡した。Ada は Arthur が正しいと思い、見当をつけてここまで来たのだった。

二週間後、今回の功により Arthur は入隊した。Melville ではなく、Mièville が傍受した電信は敵にとって最重要なもので、ブリュッセル経由でパリに届いていた。

地形が想像しにくく、最後に突然現われる Mièville 云々が理解できないが、“ Marconi apparatus ” や “ the Morse cord ” が出てくるので、当時考えられていた情報戦がうかがえる物語である。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Arthur	阿塞
Ada	亞達
Melville	米路威魯
Gull Rock	加樂峯 或いは 加羅峯

翻訳は省略が非常に多い。Arthur と Ada のやりとりや Arthur の尾行の細かな様子が大幅に省略され、物語の展開を追うことが主になっている。どのように縮めているかを示す個所を一例挙げておく。主人公を紹介する場面である。

He was the son of Squire Daryl, of Daryl Court, and his companion was the daughter of the rector of St. Benwiths, the little village between Mullion and the Lizard, in which Daryl Court was the principal residence. The young people had known each other from earliest childhood, and though it was too soon yet to think of wedding-bells, it was common talk through all the countryside that Arthur Daryl and Ada Penruddock were “ as good as engaged. ” (47頁)

(彼は Squire Daryl、Daryl 判事の息子で、お相手は St. Benwiths、Mullion と Lizard 半島の間小さな村、の牧師の娘だった、その村で Daryl 判事は重鎮であった。若いカップルは幼い頃からお互いに知っており、ウェディングベルのことを考えるにはまだ早すぎるが、Arthur Daryl と Ada Penruddock が “ 婚約したも同然だ ” ということは村中の共通の話題になっていた。)

阿塞者。爲大雷阿之子。爲郷之紳士。大有聲於時。女名亞達。爲牧師愛女。此二人。兩少時已相識。過從無間。雖無求婚之意。然識者已知其決成連理。(1頁下)

(阿塞は大雷阿の息子、大雷阿は土地の名望家で、当時評判が高かった。女性は亞達と言ひ、牧師の娘だった。二人は小さい頃からお互いに知っており、親密に付き合っていた。求婚の気持ちはないが、二人の知り合いは彼らが結婚すると考えていた。)

本作のクライマックスとも言うべき Arthur がスパイの正体を暴く場面を挙げる。

The spy read the code pencilled by the aerial current but slowly, and his pursuer, gloating over coming victory, was in no haste to reveal himself. Five, ten minutes passed, and then, as the tucking of the slip into a pocket-book and the readjustment of the recorder presaged departure, Arthur rose and said quietly :

“ Well, monsieur, it is my turn to put you through a viva voce exam. to-day. What's the French for wireless telegram ? ” (61頁)

(そのスパイは空からの電流によって記された信号をゆっくりと読んでいた、追跡者は勝利目前でほくそえみながら、あわてずに姿を現そうとした。5分、10分と過ぎ、その後、彼が紙入れの中にその紙片を押し込み、受信機を再調整し、その場から去ろうとしている時、Arthur は立ち上がり、静かに言った :

「さて、monsieur、今日は私の方があなたに面接試験を行ないましょう。“無線電信”のフランス語は何でしょう？」)

可十餘分鐘後。收取機器。匆匆欲行。阿塞曰：“先生無恙。此一次吾將面試先生矣。敢問法國無線電報。作何用法。”(5頁上 コロン、引用符は補った、以下同)
(10分あまり後に、機器を片付け、あわてて去ろうとしていた。阿塞は「先生、今日は。今度は私が先生を面接しましょう。お尋ねしますが、フランスで無線電信はどのように使うのでしょうか?)

中国語訳は前の方を省略している。

2 - 3 《法國魚雷艇受擒》

原作は、『Seaward for the Foe』 「 The Troopship and the ‘ Destroyer ’ 」である。あらすじを紹介する。

インドから1200名の兵士を乗せてイギリスに帰る途中の輸送船 Britannia はジブラルタルに着いた。開戦は時間の問題とされており、Britannia は石炭を積み込むと出港した。兵隊の指揮官は Patten 大佐で家族と共に乗り込んでいた。ジブラルタルにいた副官 Charley Haldane も本国からの命令で乗り込んできた。副官は情勢を伝え、開戦してもフランスの新型水雷艇に遭わなければ大丈夫と述べた。副官は大佐の娘、Violet と恋仲で、大佐はそれに反対していた。船内で大佐は二人が会わないように監視したが、船長 Sandrock は二人に味方し、海図室を密会の場として与えていた。出港二日目、国旗を掲げない水雷艇を見つけすれちがう。船長らが不審に思っていると、水雷艇は反転し追いかけてきた。接近した所で、水雷艇はフランスの国旗を掲げ、Britannia を威嚇し停船させる。Patten と Sandrock は水雷艇の艇長の要求に従い、Britannia を艇に従わせてフランスへ向かう。Haldane は反抗を申し出るが、Patten に拒絶される。Haldane は一計を案じ、その計画に乗った Sandrock は何も知らない Patten と共に、水雷艇に信号を出し、手に負えない反乱者 Haldane を引き取るよう求める。水雷艇は快諾し、Haldane を乗船させる。Haldane は艇内で監禁もされずに目立たないように動き、羅針盤のそばに行く。夜になり、更に進んでいると、他の船からライトを浴びる。水雷艇長はフランス艦の出迎えだと喜ぶが、それはイギリス艦隊であった。Haldane はポケットに磁石を入れており、羅針盤の針を操作していた。Britannia へ戻る Haldane を最も熱烈に迎えたのは Patten だった。

恋仲にある男女、それに反対する女性の父、戦争に巻き込まれ、味方が窮地に陥る、そこで男性が機転を利かし敵を降伏させ、女性の父は男性を認める、この点では「 How the ‘ Vengeur ’ Came to Bournemouth 」と同パターンの展開である。

Haldane を水雷艇に移す時、身体検査をせず、移してからも拘束しなかったとは、考えられない設定で、フランス軍の愚かさを強調している。磁石一つで簡単に騙せるほど、イギリスとフランスは距離が近いことがわかる物語である。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Haldane	夏雷德音
Patten	巴騰
Violet	瓦歐蓮忒
Sandrock	珊早洛克
Britannia	不雷探尼亞

本文については、やはり省略が多いことが言える。省略しながら訳している例を挙げる。Haldane が水雷艇について説明する場面である。

“ If one of the thirty-knot ‘ destroyers, ’ which the French have been so busily building, turned up, there would be trouble, ” was the reply. “ Luckily there are only three of them, and two are known to be at Toulon, where they have not to be reckoned with. The other has not been satisfactorily accounted for by the Intelligence Department, but she is believed to be at Cherbourg, where she would be equally harmless. ” (85頁)

(「30ノットの「水雷艇」、フランスが急いで建造したもので、それが現れれば厄介なことになるでしょう」と答えた。「幸運にもその水雷艇は三隻しかありませんし、二隻は Toulon にあることが知られているので、心配しなくてもよろしいでしょう。もう一隻は情報部からも十分な報告がないのですが、Cherbourg にあると見られており、やはり同様に無害と思われます。」)

副官曰：“法國新造一魚雷艇。一句鐘可行三十哩。果遇之海中。不無可慮。幸但有三艘。其兩艘尚在土郎。其一艘則在細泊克。細泊克固近英國。然吾行必不與遇。”(2頁上)

(副官は「フランスは新しく水雷艇を建造しました。1時間に30マイル進めます。もし航海中に出くわせば、憂慮しないわけには行きません。幸いにも三隻しかなく、二隻はまだ土郎にあります。一隻は細泊克にあり、細泊克はイギリスに近いのですが、この航海で出くわすことは全くありません。」)

1ノットは時速1852メートル、1マイルは1609メートルだから、中国語訳は速度が落ちてしまっている。更に、Haldane がどのように水雷艇の進路を変えさせたかを述べる場面を挙げる。

“Perhaps this will explain it, monsieur,” said Charley Haldane, triumphantly producing the lump of loadstone which, from his pocket, had drawn the destroyer's compass-needle into the necessary deviation.(99-100頁)

(「恐らくこれが説明してくれるでしょう、monsieur」Charley Haldane は、水雷艇の羅針盤の針を引きつけ、必要な針路変更をもたらした磁石の塊をポケットから取り出し、勝ち誇った様子で示しながら言った。)

夏雷德音曰：“將軍尚不明耶。吾有大磁石。藏之囊中。令爾羅盤中針鋒亂也。”(6頁上)

(夏雷德音は「將軍はまだおわかりではないのですか？私は大きな磁石を持っており、ポケットに隠していました。それによって羅針盤の針を狂わせたのですよ。」)

2 - 4 《馬格梯氣球》

原作は、『Seaward for the Foe』 「How Margate Saved Sheerness」である。あらすじを紹介する。

開戦後も Margate の町では人々が休暇を過ごしていた。海沿いの舞台では歌謡ショーが行なわれていた。そこに農民 John Maybridge の娘 Jenny(妹)と Alice(姉)も一

日の休みをもらって来ていた。姉妹は歌謡ショーの後の気球浮上の催しを楽しみにしていた。気球の催しの開始が遅れ、5:30の列車で帰る予定だった姉妹は少し迷ったが、結局、次の列車に乗ることにし、最前列で気球が浮上し南へ飛んで行くのを見た。

その間、父の John は収穫物を運ぶ作業で忙しくしていた。娘たちの帰りが遅れていることはそれほど気にしていなかったが、夕暮れの中、時々雷が光っていたので、嵐が来るかも知れないと心配していた。そこに Alice の恋人で、絹商人の Frank Ainslie がやってくる。彼は農場で休暇を過ごす予定だった。John が娘たちの帰りが遅れていることを話し、作業を続けていた所、雨が降り出した。二人が家に戻りかけた時、雷の光で巨大な物体が家の周りの木の所へ下りて来るのが見えた。二人は土砂降りの中、気球の方へ向かった。気球の下では二人の男(Bewlay と Rennie)がゴンドラから何かを降ろしていた。John は声をかけ自分の家で休むよう誘った。二人は礼を言い、砂袋状の荷を持って彼について行った。二人は Margate から来たと言う。途中、荷物を持つのを申し出た Frank に対し、二人は頑なに拒否し、雷雨の中、四人は家に着いた。家の中で、Frank は二人の服装や荷物の説明、着陸の理由等から疑問を感じる。嵐が過ぎたので、Frank は駅へ姉妹を迎えに行く。その際、John から姉妹を驚かせるためと言われ、気球のことは口止めされる。帰り道、姉妹が話した気球の飛行方向に Frank は困惑する。

三人が帰宅し、全員が夕食の席に着いた時、気球の二人は John の意図がわからず、姉妹は気球の二人がわからず、John の説明を聞いても皆落ち着かない様子だった。話題がその日の歌謡ショーに移り、John が気球の二人に歌のタイトルを尋ねると、二人ともうつむいてしまった。Frank が流行歌のタイトルを言うと、二人はその歌だと言い、すると今度は姉妹がうつむいてしまった。Frank はこの会話にもねじれを感じた。気球の二人が John に従って寝室に向かった時、Frank は姉妹からその歌は歌われなかったことや彼女らが見た気球の乗員とその二人とは全く似ていないことを聞く。

三人は気球を見に行った。気球には砂袋や折りたたみボート等があり、気球の二人が敵のスパイだと確信した三人が戻ろうとした時、彼らが砂袋状の荷を持ってやって来た。三人は身を隠し、二人の会話を聞く；その荷はダイナマイトで、Sheerness の造船所を爆撃するためにやって来たのだった。三人は一計を案じ、姉妹が大声を上げ、二人がひるんだすきに、Frank が気球を留めていたロープを切っ

た。二人は荷を置いて逃げ出したが、6時間後に捕まった。三人が家に戻ると、John が縛られていた。John は三人の話を聞くと、「老人が誇りを持てるような若者たちがいるので、こんな仕打ちは何でもない」と言った。

造船所をダイナマイトで破壊するという任務を帯びているにしてはやさしいフランス兵のおかげで、誰も傷つかない物語になっている。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Maybridge	馬白勒諸
Jenny	曾納爾
Alice	亞利司
Frank	佛蘭克
Bewlay	比威禮
Rennie	温内
Margate	馬格梯

本文については、やはり省略が多いことが言える。特に、後半部で Margate から来たと偽った二人について、徐々に化けの皮がはがれていく様子や Frank が疑いを深めていく部分が多く省略されている。

大きな改訳はないが、小さな改訳が見られるので触れておく。最後の部分で、原作は、二人が逃げ出し6時間後に捕まるが、誰に捕まるかは書いていない(138頁)。一方、中国語訳では、Frank と姉妹の三人が追いかけて二人を捕まえたことにしている(5頁下)。逃げた二人が火器を身につけておらず、慌てていたとしても、刀剣類は持っていたと考えられるので*2、わずか三人で、プロの兵士二人を捕まえるのは不可能であろう。

省略例を挙げる。Frank と気球の二人とのやりとりである。

“ And yet it must be a common risk in your profession, ” said Frank Ainslie. “ I have heard that during thunderstorms it is the usual practice of aëronauts to let

the balloon rise above the clouds, out of harm's way. ”

The pair eyed him curiously, as if to divine whether this, the second critical comment he had made on their methods, was purposely aggressive or arose from a genuine desire for information. Whichever conclusion it was that they came to, they broke into a good-humoured laugh. (129頁)

(「それはあなた方の職業において共通の危険でしょうけれども」 Frank Ainslie は言った。「雷の中では気球を雲の上の安全な所まで上昇させるのが通常の訓練だと聞きましたよ。」)

二人は彼を好奇の目で見つめた、まるで二人のやり方について彼が言ったこの二回目の批判的な話が、故意につかかったものなのか、それとも情報への純粋な欲求からきたものなのかを占っているかのようだった。出した結論がいずれにせよ、二人は突然陽気に笑い出した。)

佛蘭克曰：“御球値雨。亦有法自全。能超出湿雲以外。則雨脚莫及。”

佛蘭克語時。二人復相顧。防爲佛蘭克偵取其隱微。(3頁上-下)

(佛蘭克は「気球を操縦して雨に遭っても安全でいる方法があります。雨雲を超えれば、もう雨は届かないでしょう。」)

佛蘭克が話した時、二人はまた顔を見合わせ、彼に秘密を悟られまいとした。)

何気ない質問で二人が動揺する部分が大幅に省略されている。もう一個所、二人の正体がわかる部分を挙げる。

“ It is a lucky thing you two went to Margate to-day, ” he said, as he completed his scrutiny. “ This balloon has come over the sea. Here is a collapsible canvas boat in case of accident while crossing, and here is a novel steering apparatus something like the one exhibited at the Crystal Palace last year. Those men must be spies, or worse. You would never think it, in a quiet Kentish farm, but we've got mixed up in the war, girls. ” (136頁)

(「今日二人が Margate に行ったのは幸運だった」と彼は言い、精査を完了した。「この気球は海を渡って来たものだ。ここに海上での事故に備えて折りた

たみの帆があるし、ここには新型の操縦装置がある　これは去年水晶宮で陳列されていたものに似ている。あの男たちはスパイかそれ以上の悪人に違いない。君たちは全く考えなかったかも知れないが、閑静なケント州の農場なのに戦争に巻き込まれてしまったんだ。」)

言曰：“幸爾兄弟。今日入城觀球。不然。幾爲人愚矣。此球非吾國之製。蓋渡海而來。敵人之球也。此爲厚布之船球。果入海者。則可用此布爲船以渡(此即古蠻荒之羊渾脫)。是二人者。間諜也。此間諜無意入我田畝之間。是其人之否運。爾二人尚不知英法已宣戰耶。”(5頁上)

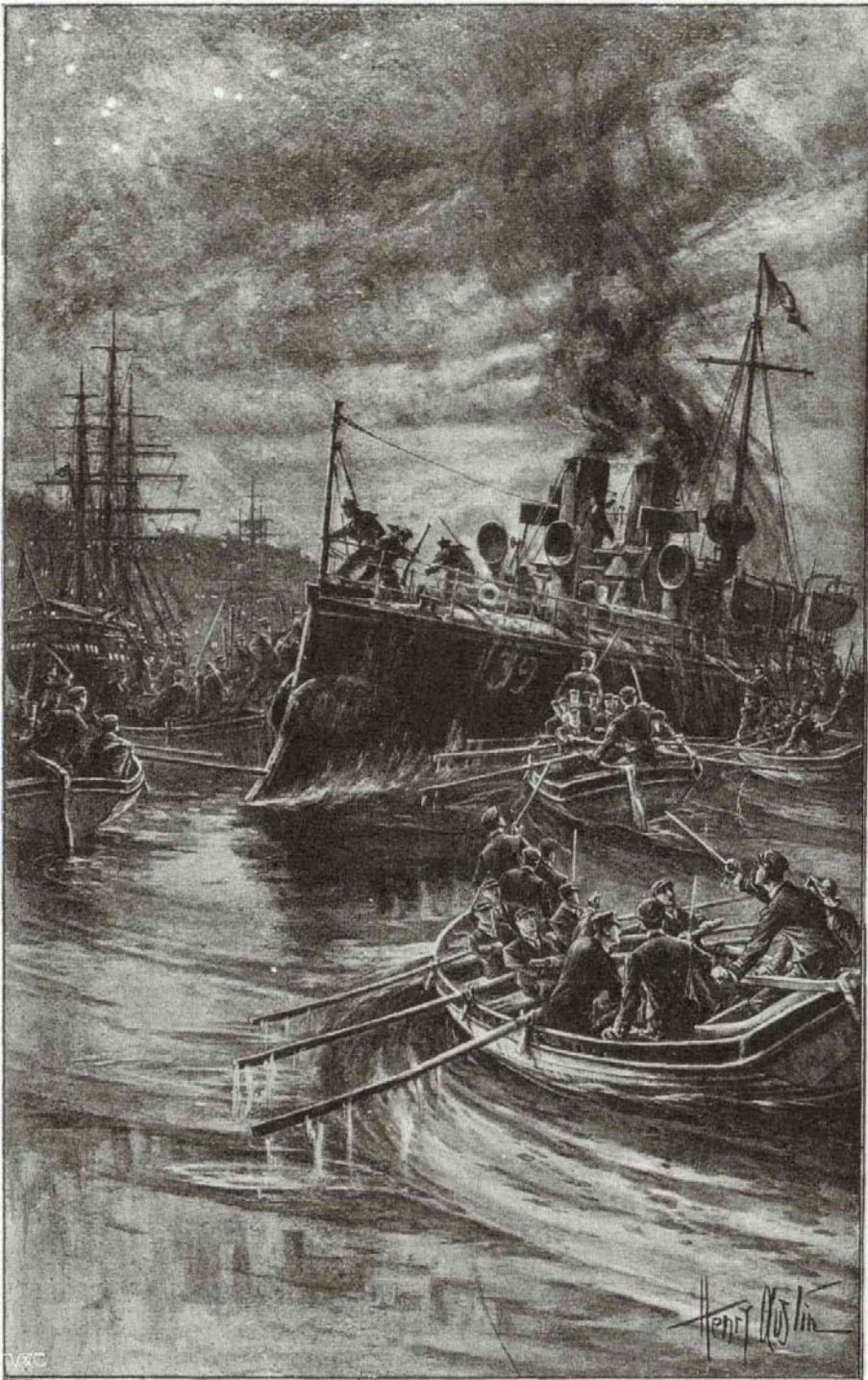
((佛蘭克は)「二人が今日町に気球を見に行っただのは幸運だよ。そうでなければ、あやうく騙される所だった。この気球は僕らの国のものではない。海を渡って来たのだろう。敵側の気球だ。これは厚布の、船にもなる気球だ。海に入れば、この布で船を作り渡るんだ(これは古代の未開民族の羊皮で作った浮袋である)。あの二人はスパイだ。スパイたちが知らずにこの農場に入って来たのは不運だった。君たちは英仏がすでに開戦したのをまだ知らないのかい?」)

Margate は海沿いの町なので、催しに使われた気球に、海での不時着用の備えがあってもおかしくないと思うのだが、あまりに大掛かりな備えだったのだろう。

2 - 5 《三十九號魚雷艇》

原作は、『Seaward for the Foe』 「 The Battle of the Boys」である。あらすじを紹介する。

フランスの Cherbourg Dockyard に水雷艇39号が泊まっており、その艇長室で海軍長官 Besnard と艇長 Descartes が今度の作戦について話していた。その作戦とは、間諜 Montesqueux の情報に基づいて、タグボート Géant と出港し、イギリスの Dartmouth Harbour に侵入し、配置の決まった練習生たちが去る直前の練習船 Britannia を拿捕し、フランスに連れ帰る；もし降伏を拒否すれば、魚雷で沈めるというものであった。話し合いが終わり、2隻は出港、霧の立ち込める海峡を進んで行く。



''With a wild cheer . . . they dashed upon the torpedo boat.''

Seaward for the Foe

[Page 157

一方、イギリスの Dartmouth Harbour の海岸では、16歳の練習生 Stuart Inman と Jem Fordyce が歩いていた。2人は翌日、Britannia を離れ、別々の船に所属することになっていた。2人の話が Jem の姉の Dorothy の話になった時、Montesqueux がボートに乗って出て行くのが見えた。その際、Montesqueux の友人 Descartes が彼女に好意を持っているかも知れないこと；その Descartes が前年ボートレースに参加した時、周りの海岸や港をよく見ていたこと；今は最速の水雷艇を指揮していること等を話した。Montesqueux がいつも単独でボートを漕ぎ出していることや彼の最近の状況に話が及んだ時、Jem はボートを追いかけることを提案し、Stuart は従う。2人は濃霧の中を追いかけ、Montesqueux のせきの音をたよりにすぐそばまで近づく。2人が Montesqueux に声をかけると、彼は喘息に海の霧が効くので来ていると言い、2人にとっては逆によくはない等と話す。2人が疑って帰らないと言った時、船のサイレンが聞こえる。Montesqueux が答えると、水雷艇が現れた。2人はとっさの判断で、ボートを Montesqueux にぶつけ、3人とも海中に落ちる。Montesqueux と Stuart は水雷艇からのボートに助けられるが、Jem は沈んで見えなくなった。10分ほどあたりを捜したが見つからず、ボートは水雷艇に戻る。Montesqueux は艇長 Descartes に暗くなってからの侵入を進言する。また、前年のボートレースのことを話したので、Descartes は沈んだのが Jem だと悟り、更にすすり泣く Stuart に冷たい言葉を言い放つ。2隻は Britannia が見える位置まで進み、Descartes は作戦成功を期待する。Britannia から壮行会の音楽が聞こえる所まで来ると、Descartes は Stuart に Géant に移って最終通告を伝えに行くよう命じる。Stuart は口もとに笑みを浮かべ、「私が持ち帰る前に回答が届くだろう」と言う。Stuart は Britannia に積まれたボートがすべて無くなっているのを見て、Jem が死なずに戻って対策を準備したのに気付いたのだった。Géant が水雷艇から離れると、すぐに Britannia 等からのボートが水雷艇に殺到し、何もする暇を与えずに制圧した。Descartes は魚雷発射間際に斬殺され、Montesqueux は2日後、絞首刑になった。Stuart と Jem は Géant 上で再会し、Stuart は Jem の泳ぎを称え、Jem は Stuart が気掛かりだったと言う。Britannia の少年たちがお互いに補い合うことで、国民は安心して眠れるのである。

冒頭にフランス側の海軍提督と水雷艇長の会話を細かく述べており、これまでの作品とは変わった始まりになっている。Stuart、Jem 2人と Montesqueux の小さな

戦いと水雷艇と Britannia 号発のボートのやや大きな戦いが、濃霧の海上に重点を置いて描かれている。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Stuart	司丑阿忒
Jem	曾姆
Descartes	德司卡忒
Montesqueux	漫忒斯鳩 或いは 漫忒司鳩

本文については、やはり省略が多いことが言える。特に、Stuart と Jem が Montesqueux を追跡する過程、水雷艇が Britannia 号に接近する場面が多く省略されている。

最後の水雷艇対ボート群の交戦部分を挙げる。

No sooner was the Géant clear of her consort than those same missing boats shot from the darkness of either shore, accompanied by every skiff, "blue-boat," and wherry attached to the training-ship, coming on silently, till a startled shout from No.39 told of their discovery. Then, with a wild cheer from two hundred youthful throats, they dashed upon the torpedo-boat. Led by the Britannia's officers, and stiffened by a handful of coastguards and instructors, the boys swept into her with the fury of a football charge, and, giving the Frenchmen no time for resistance, would have given them no quarter either if they had had their way.

In counting the cost of the victory, it was found that beyond many cuts and bruises, and a much-prized bullet-wound in a fourth-term cadet's leg, the boys' battle had been lightly won. Even on the French side there was only one fatality to Descartes himself, whom the captain of the Britannia cut down as he was on the point of exploding a torpedo. The summary hanging of Montesqueux as a spy two days later can hardly be reckoned. (156-157頁)

(Géant 号が水雷艇から見えなくなるや否や、兩岸の暗闇から無くなっていたボートが勢いよくとび出してきた。彼らはあらゆる小型船、“blue-boat”、練

習船に属する渡し舟と共に、水雷艇の驚きの叫びがその発見を知らせるまで、音もなく近づいていたのだった。そして、200名の若者の大きな歓声と共に、水雷艇へ突撃して行った。Britannia 号の将校たちに率いられ、少数の沿岸警備隊と教官らに補強され、若者たちはフットボールのチャージのような猛烈さで船内へと殺到した、フランス人たちに抵抗する暇を与えず、自分たちがどうすればいいのか考える猶予も与えなかったであろう。

勝利の代償はと言えば、切り傷や打撲傷を負ったものが多数と4期生で足を撃たれ名誉の負傷をしたものが1人いた、若者たちの戦いはたやすく勝利を収めたのである。フランス側も死者はわずか1名 それは Descartes 自身で、魚雷を発射する間に、Britannia の船長が斬殺したのだった。2日後にスパイとして即決の絞首刑となった Montesqueux は数えていない。)

更帖之船甫開。而岸下小船。已如蟻而至。環攻此艇。躍然登舟。手槍如沸。船主方欲注射魚雷。背上已受一劍。立仆於艙中。此艇遂爲英人所得。而漫忒司鳩逾日亦槍斃。討間諜也。(5頁上)

(更帖号が動き出すや否や、岸の方からボートが蟻のように現われ、水雷艇を囲んで攻撃し、勢いよく船に乗り込み、拳銃が撃ち鳴らされた。艇長は魚雷を発射しようとして、背中から切られ、すぐに倒れてしまった。水雷艇はイギリス側に占拠された。漫忒司鳩も過日スパイの罪で銃殺された。)

戦闘場面の割には原作もあっさりとした描写だが、中国語訳は更に削って要約のようになっている。もう一個所、濃霧の中、ボートで沖に出た Montesqueux に、Stuart と Jem が追いついて声をかける場面を挙げる。

“ Why, it's Monsieur Montesqueux ! ” cried Stuart, in seeming surprise. “ Do you want any help ? ” added Jem politely. “ It's a bit thick out here, monsieur, eh ? ”

The French professor a man of slight build, and with a sneaky mouth scantily covered by a fair moustache, from which the damp air had taken the usual dapper curl was in nowise disconcerted by the sudden apparition of his late pupils.

“ Ah, ha! it is Mr.Inman and Mr.Fordyce, ” he cried. “ No, I thank you, gentlemen. I have come out here for my health. I suffer very badly from the asthma, and the sea-fog is good for it. ” (148頁)

(「 あっ、Montesqueux さんですか！ 」 Stuart は驚かせるように叫んだ。 「 お手伝いは必要ですか？ 」 Jem が丁寧に付け加えた。

フランス語教師は 細い身体で、湿気のために普段のさっとしたカールが無い、端正な口ひげにわずかに覆われた、陰険そうな口の男 生徒の突然の出現にも全く狼狽しなかった。

「 おお、Inman 君と Fordyce 君だね 」 彼は叫んだ。 「 いや、大丈夫だよ、お二方。私はここには健康のために来ているんだ。私は喘息にひどく苦しめられているが、海の霧はそれに効くからね。 」)

司丑阿忒曰：“ 漫忒司鳩先生。在此何爲。 ” 曾姆亦曰：“ 先生划舟在此霧中。有宜需我助力否。 ”

漫忒司鳩久在霧中。而鬚髯亦爲霑湿。方自撚弄。忽聞人聲。則大驚駭。

即曰：“ 來者其司丑阿忒。及曾姆耶。爾問我來此何作。我蓋爲休養體氣來也。我素有喘病。醫言須吐噏海上霧氣。病可以已。 ” (3頁上)

(司丑阿忒は「 漫忒司鳩先生、ここで何をしていますのですか？ 」 曾姆も「 先生、こんな霧の中でボートを漕いで、我々のお手伝いが必要でしょうか？ 」

漫忒司鳩はずっと霧の中にいたので、ひげも濡れていた。それをよじっていた所、突然声を聞いたので、大変驚いた。

すぐに「 やって来たのは司丑阿忒と曾姆だね。私がここで何をしているのかというと、身体と心を休めるために来ているんだよ。私はもともと喘息があって、医者が言うには、海の霧を呼吸すると病気が治まるそうなんだ。 」)

細かい部分であるが、原作は、濃霧の海上でいきなり声をかけられても動じない、スパイとしていつでも冷静な Montesqueux としている。しかし、中国語訳は、大変驚いてしまう、普通の人の Montesqueux としている。どんな場面でも落ち着いて、どんな奇怪な説明でも平然と聞かせるような Montesqueux の働きがあって、フランス側の作戦の準備が整えられたと思うのだが、それを変えてしまっただけは面白みが減じるであろう。

単語の訳について、水雷艇が Britannia に出す最後通告 “ ultimatum ” (155頁)を、“ 哀的美敦書 ” とそのまま音訳している(4頁下)。突然、人名とも地名ともわからない言葉が現われるので、読者は戸惑ったであろう。

2 - 6 《挖地道》

原作は、『Seaward for the Foe』 「 The Peril of London 」である。あらすじを紹介する。

ロンドン警視庁の Nevill は、大陸での仕事を終え、カレーとドーバーを結ぶ船に乗り込んだ。船は戦争の影響でイギリスに戻る客でごった返していた。その中で Nevill は、恰幅のいい裕福な乗客に注意を向けた。その男の所には混雑する船内にもかかわらず、十数人の客が一人ずつ話しをしにやって来てすぐに立ち去っていた。その十数人はお互いに話をする事も無く、共通点といえば、屈強な体格をしていることだった。Nevill は友人の船長に尋ねた所、その男は Despard という百万長者で、ドーバーと St.Margarets の間に Brandon Towers と呼ばれる土地を所有し、大規模な庭園を造っている - 4年前に購入したその土地にイタリア式庭園を造ると言っ、外国人労働者を連れて来ていた。

Nevill はその後も観察を続け、下船後、Despard は迎えに来ていた馬車に乗り込む。Despard と話した十数人がはかったように別々の車両に乗り込んだり、うっかり Despard の馬車に乗ろうとした1人がフランス語で罵られたりするのを見た Nevill はロンドンに帰るのを延期し、Brandon Towers に行き調査を続けることにする。彼はまず近くで聞き込みをし、一般にも公開しているとの情報を得て、その門から入ろうとするが、改修中ということで断られる。どうすべきか思案していた所、馬車が現われ、それにはあの十数人が乗っていた。

Nevill は調査続行を決心し、警報装置の電線に守られた敷地内に侵入、木々の間を進み、花と芝生に覆われた段々になっているテラス状の庭園にたどり着く。茂みに身を隠しつつ、テラスの積み上げた土はどこから持って来たのかを考えながら、園内の邸宅を見張っていた。馬が引く線路や家の入口から土を積んだ手押し車が次々に運び出されるのを見て、Nevill はフランスにつながるトンネルを掘っており、完成間近の段階であろうと思った。助けを呼ぶ当ても無いので、彼は1人で家の入口まで突進し中に入った。手押し車が通る厚板をたどり、ランプに照らされた広い

道を見つけ進んでいく。行き止まりかと思った時、そこにはスライド式の鉄扉があった。その向こうでは Despard が、明朝には10万のフランス兵がここに達し、夜までにはロンドンに進むだろう等と作業員に話していた。Despard が扉を開けて出て来るや否や、Nevill は彼を捕まえ、扉を開かないようにした。

Nevill からの緊急連絡で到着した兵たちによると、イギリスは危機一髪の間であった。トンネルはすでに通じており、作業員らは最後の部分を爆破してフランスに逃げていた。

海峡横断トンネルを題材にしたスケールの大きな短篇である。大量の兵士が横断できる規模で、もちろん途中で酸素が欠乏しないような装置も必要だろうし、当時の技術水準で可能なのか、一体何年前に工事を始めたのか等と疑問が出てしまう。現在ならば、むしろその工事の過程を描いた方が読者に感動を与える作品になるだろうとも思ってしまう。

中国語訳について述べる。まず主な固有名詞の対照表を挙げる。

原文	中国語訳
Nevill	尼威羅
Despard	徳司巴得
Brandon Towers	不來登 頭倭

本文については、やはり省略が多いことが言える。フランスによるトンネルをイギリスの警官が偶然に見つけ、完成直前に阻止するという、複雑ではない物語なので、翻訳も筋は変えていないが、特に後半部分で、Brandon Towers の敷地内の様子や Nevill の行動及び思案の細かな部分が省かれている。小さな改訳を2箇所挙げる。

最初に、連絡船の船長から Despard について説明を受け、彼の何に関心があるのかと聞かれた後の Nevill の台詞である。

“ Not much except that I like to get to the back of things; and a man who wears a fur coat is generally either a big nob or a wrong-'un, ” replied the detective. “ As you say that he is the former, he has no interest for me at all. ”

(163頁)

(「特にはなくて 理由をつきとめただけです；毛皮のコートを着た男は普通、大金持ちか悪党のどちらかでしょう」と刑事は答えた。「彼は前者だと教えてくれたので、私には全く興味がなくなりました。」)

尼威爾^{ママ}曰：“別無所疑。但此夏令。何爲著裘。非風亦病。不能不問。且君不言彼爲風乎。風人與我何與。置之可也。”(2頁上)

(尼威羅は「別に疑わしいことはありません。ただこの暑い時期にどうして毛皮を着ているのか、狂人でなければ病人なのか、聞かずにはおれませんでした。彼は狂人じゃないかと教えてくれたでしょう。狂人ならば私と何の関わりがありましょう。放っておけます。」)

確かにこの台詞の前に“the mad millionaire”(162頁)を“風狂之富翁”(1頁下)と訳す個所があるが、ここで何故に“風”と“病”にしてしまったかが不可解である。

次に、最後の場面である。Nevill が Despard を捕まえ(この短篇唯一の流血が記述される)、作業員たちをトンネル内に閉じ込めた後である。

It remained but to send the two truck-men flying across the park by the simple expedient of producing Despard, handcuffed, at the front door, thus suggesting that there was a strong force of police within.

How narrow an escape the country had may be judged from what the soldiers found when they arrived from Dover in response to Nevill's urgent message. The connection had been completed, and the excavators had escaped through the tunnel to France, after blowing-in the last section and rendering their work useless for friend or foe. Needless to say, the Royal Engineers saw that this temporary demolition became permanent. (177頁)

(あとは荷馬車の御者を追い出すだけで、2人は庭園を横切って逃げていった、それは手錠をされた Despard を前方の扉から出すという単純なやり方だった、そのようにして中に強力な警察がいることをわからせたのである。

Nevill の緊急連絡に応じてドーバーから到着した兵士たちの発見から察するに、国家は間一髪の危機脱出だった。トンネルは完成しており、作業員らは最

後の部分を爆破し、友軍にとっても敵軍にとっても自分たちの仕事を無にした後で、それを通してフランスへ逃亡していた。言うまでもなく、イギリス陸軍工兵隊はこの一時しのぎの爆破取り壊しが永続するだろうと判断した。)

即出鏢於衣囊中。械其兩手。力引之出。時引車者。尚有二人在外。見德司巴得見擒。知事敗矣。立奔而去。尼威羅即載此富翁於土車中。出赴警局。非是一舉。全英隳矣。地道之鐵門已閉。法兵遂歸。於是英以工程驗之。果通於法國。則以鐵汁錮其門。塞其隧道。(5頁)

(すぐにポケットから手錠を出し両手にかけて引っ張って出て行った。その時、御者が2人まだ外にいたが、徳司巴得が逮捕されているのを見ると、作戦が失敗したと悟り、すぐさま逃げ去った。尼威羅はすぐにこの富豪を土砂の運搬車に乗せて警察署へ行った。この行動がなければ、イギリス全土が破滅していたのである。トンネルの鉄門はすでに閉ざされ、フランス兵は帰っていた。そこでイギリスが工事して調べた所、果たしてフランスにつながっていたので、溶かした鉄で封鎖しトンネルを塞いだのである。)

中国語訳に細かい加筆が見られるほか、なぜかトンネル閉鎖をイギリス側の工作にしている。無論イギリス側もしっかりと後始末をしたであろうが、やはり不可解である。

2 - 7

原作は、出版当時(1903年)としては珍しかったであろう「潜水艦」「気球」「無線」などを採り上げ、深刻さは感じられないが、民間人が巻き込まれる戦争を描いている。

中国語訳が発表されたのは、第一次世界大戦真っ最中の1916年である。恐らく林紓らはそのような背景も考えて、この原作を選んだのだと思う。ただ、全10篇のうち、6篇しか訳さなかったのは、もちろん《紅篋記》の篇数に合わせたのであろうが、或いは訳していて時代遅れを感じて、興味を失ったのかも知れない。

最後に、作品名の訳は、「The Wireless Telegram」 《無線電報》と直訳している以外は、自由に変更している。中でも「The Peril of London」 《挖地道》(トンネルを掘る)としたのは、物語の最終段階まで伏せておくべき内容をいきなりばらし

ているので、もったいないと思う。



【注】

- 1) 《小説月報》は東豊書店の影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》(1979年10月)を使用した。影印には奥付が無いので、発行年月日については、『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編,齊魯書社,2002年4月)を引用した。以下同。
- 2) 137頁に二人の台詞として、“...we might have had to cut that prying youth's throat”(「...俺たちはあの詮索好きな奴ののどを切らねばならなかったかも知れない」とある。

【参考文献・ホームページ(HP)】

- 井上十吉(森下生訳)「著名なる探偵小説家と其作品」 - 『新青年』第3巻第3号(博文館,1922年2月10日)所収
- 延原謙「歐米探偵作家著作目録」 - 『新青年』第7巻第3号(博文館,1926年2月10日)所収
- Dr.James Kennedy、W.A.Smith、A.F.Johnson 『Dictionary of Anonymous and Pseudonymous English Literature』Volume7,Oliver and Boyd,1934年
- William G. Contento 管理 HP「The FictionMags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2009年6月26日確認)

(わたなべ ひろし)